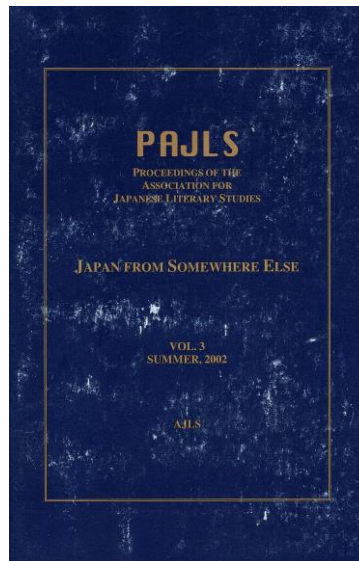


「無題」

伊藤比呂美 Itō Hiromi

*Proceedings of the Association for Japanese
Literary Studies* 3 (2002): 145–146.



PAJLS 3:
Japan From Somewhere Else.
Eiji Sekine, Editor; Joyce L. Detzner, Production Editor.

無題

伊藤比呂美 (Itō Hiromi)

自分をみつけるための文学なんて、子どものころに夢中になった太宰治、中也や朔太郎、ライ麦畑や車輪の下、そんなあたりでおわりかと思っていました。それがいまだにあるのだという発見がおどろきでありました。新鮮でありました。詩の意義の、ひとつは(たったひとつにすぎませんが)癒しであり、治すことである、とわたしは思っていました。それが実証されたみたいで、ひじょうに愉快であります。

最初に平田ホセアさんと井上チャールズさんが「マンザイ」をはじめたときにびっくりしたのなんのって。

それにつづいた学者たちの発表が、なんだかわたしにはほとんど各種セルフヘルプの会合のように聞こえたのであります。摂食障害のヒロミです……なんていうふうには、いえ、失礼。学者たちの発表はたいへんおもしろかったです。わたしは、英語はぜんぶはわかりませんけれど、聞き惚れてしまいました。セルフヘルプみたい……と思ったのは、さいしょのマンザイの印象に左右されたのか、ほんとうにそうだったのか、わかりません。「学会」は、はじめてでした。

今まで、アカデミックなものには縁がなく、大学で教えたこともなく、ひたすら、注文されたものを書いて売るといふ、村のかじやみみたいな職業詩人の生活をしてきたので、アカデミックな世界には縁がなかったんです。

こういう人たちがいるから、村のかじやみみたいなわたしらの行為も浮かばれるのだなど、聞きながらありがたく思いました。こういう人たちにわたしの最近の作品を読んでもらいたいなど。

しかしだれも読んでない……あたりまえです。翻訳がろくにないし。かれらの興味の対象となるものとは、ちょっといえない。

扱われる文学が、日本の外に住む日本語作家の作品が多いのには、すぐ気づきました。アメリカに住んでいる日本出自の研究者が、そういう作家たちに興味を持つのはとうぜんです。

だからセルフヘルプみたいだと思ったのかもしれない。

大学で教える人たちのことを、木石のような人たちと思ってましたけど(大学で教わった先生たちが、まるで木石みたいにわたしたちに日本文学を教えていたんです)、とりあげた文学を、自分の興味、経験にてらして読みこんでいく行為を、まざまざとみせつけられたような感じでした。それならわたしたちが日々やっている文学の表現と、なんらかわりのないであります。そこにはじめて気がつきました。学者がそうなんだから、批評家というやっかいな人たちもそうなのかもしれない。そうです、読者はまさにそのためにわたしたちの書いたものを読むのです。……そこで冒頭の、自分をみつけるための文学というものに、思い当た

りました。文学の原始的な効能にぶちあたったような気がしました。自分がだれか、なぜここにいるのか。

人間くさい学会だと、しみじみ思いました。ひどく人間くさい。

わたしは、カリフォルニアに、とくべつこれといった理由もなく移住してきて、6年になります。日本にいつらなくなったのでアメリカに来ちゃったという、そういう理由ですよ。早まったことをしたと後悔しています。日本語の詩人には日本語の環境が必要でした。でも今はここでやっていくしかありません。

日本語を話す相手といたら、思春期の娘しかいません。だから語彙が限定され、敬語表現が忘れ去られ、思春期表現が（むかつく、すげー、など）が闖入してきて固定されてしまいました。日本語の詩人であるわたしは、ちんぷなたとえて使うのも気がひけますが、おかにあがったかっぱです。

娘は3年間口をひらかなかったので、緘黙症（mutism）と診断されて、いえ、日本にいたときは元気で活発な子どもだったのです。3年間、母としては悩みました。石の上にも三年といいますが、3年目に話しはじめたんです。今は、英単語を日本語の助詞や助動詞でつなぎとめて、かろうじて日本語をしゃべっているふりをしている……。

口を開かなかった三年間を思えば、毒くらわば皿までという気になって、一蓮托生、矢でも鉄砲でもという気持ちになって、さびしい日本語に対峙してます。のしてくる英語にも、肅々と対峙してます。

わたしは、昔は日本語で、朗読するのがとくいだっだし、好きでした。今は、そんな機会ががっかりと少なくなりました。たまの機会には英語で朗読するようになりました。英語では思うように表現できません。ことばをつかんで飛翔できたという瞬間に到達することがない……。だから朗読する行為そのものがつまらなくなる……。

タフツで、わたしがいただいた40分。

陳腐すぎて使うのもほんとに気がひけますが、「水を得た魚」とはこんなことかと思ひながら、わたしはことばを、日本語を、操っていました。

魚としては、体内の器官のすみずみにまで水が行き渡るのを実感してました。だいたいカリフォルニアは乾いていすぎるんです。梅雨が恋しいと三日に上げずに思います。あんまり乾いているから、皺だらけになってしまいました。

朗読が長くなりすぎて、さいごにホセアさんに時間ですといわれたときにも、そのとき読んでいたのは英訳（自分でやりました。だから自分で知ってる単語しか使ってなかったんです）でしたけど、それはわたしの日本語だったと思うんです。東京の育ちも、ことばの経験も、英語にたいする愛憎も、ぜんぶ認識して、それなのになお、ここにいるわたし。英語であってもそれは日本語でありました。